

宮沢賢治の手紙

教師をやめて本当の百姓に、羅須地人協会の頃――

米田利昭

本当の百姓とは

207 大正十四（一九二五）年六月二十五日 保阪嘉内あて

お手紙ありがとうございました

来春はわたくしも教師をやめて本当の百姓になって働きます。いろいろな辛酸の中から青い蔬菜の毬やドロの木の閃きや何かを予期します。わたくしも盛岡の頃とはずるぶん変つてゐます。あのころはすきとほる冷たい水精のやうな水の流ればかり考へてゐましたのにいまは苗代や草の生えた堰のうすら濁つたあたかなたくさんの微生物のたのしく流れるそんな水に足をひたしたり腕をひたして水を繕つたりすることをねがひます。お目にもかゝりたいのですがお互ひもう容易のこととでなくなりまして。* 童話の本さしあげましたでせうか

* 童話の本……『注文の多い料理店』のこと。

生涯の友保阪嘉内にあてた最後の手紙である。賢治が農学校の教師をやめたのは大正十五年の三月、始めたのが十年十二月だから、四年四ヶ月の教員生活だった。ある人が、教師としてマンネリズムに陥つたので、そうならなかった賢治に学びたい、と言った。気持は分るが、十年も二十年も教師を続けていればこそマンネリにもなるので、たつた四年でやめた賢治はマンネリズムになりようがなかった。やりたいことが次々に出て来て、教師などやっていられなくなったのだろう。高等農林の友の一人が言ったように、彼は少し猫背でいつも微笑をたたえサツサツと歩く、そのようにしてサツとあの世へ行ってしまったのだから。さて、教師をやめたのは大正十五年だが、その一年前から来春はやめる、と言った。大正十年の家出の半年前にそれを予告し、碎石工場へ出る一年前から今度は海岸へ出て水産加工か、それとも仙台へ出て勉強かたがた石灰を売るか、と言ったように。彼は自分の変化を予知し、実行する男だった。

即ちこの手紙より少し前の四月十三日に、教え予で樺太の王子製紙

につとめた杉山芳松にあてて、

「わたくしもいつまでも中ぶらりんの教師など生温いことをしてゐるわけに行きませんから多分は来春はやめてもう本当の百姓になります。そして小さな農民劇団を利害なしに創つたりしたいと思ふのです。」

といった。〈利害なしに〉は賢治独特の用語の一つで、利益を追求することなしに、つまり金儲けとしてでなく、という意味だが、本当の百姓になることと、いくら職業としてでなくとも農民劇団を作ることとは矛盾しよう。一つでさえ容易ならぬのに二兎を追うとはと、普通なら思う。どたい近代の世の中では何事も〈利害なしに〉することなどできぬのだ。強いてしようとすれば誰かの金——賢治の場合は当然父の金ということになる——をあてにすることになり、じじつ彼はそれをあてにしたのだ。そのうえ劇団を作るとなれば、それには詩や童話の本を作るのとはケタちがいの大金がかかる。そのために彼は百姓をして自活すること——だからはじめは農村救済といった大それたこととでなく——父の負担を出来るだけ軽減したいと考えたのだろう。そこで、百姓をすることと劇団を作ることとが、賢治にとっては表裏一つのことだった。

しかしこれにはもう少し内面的な繋りもあった。百姓をしながら芸術活動をするでは、誰しも大正中期に武者小路実篤の始めた「新しき村」を思い浮かべるだろう。友の保阪が武者小路の心酔者で、彼の口から何度もそれは聞いたろう、その東北版である。また賢治は大正十二年五月と十三年八月に自作の劇「饑餓陣営」その他を農学校で監督

上演したが、その直後の九月に学校劇禁止令が出されたので、これからはもう学校ではやれなくなった。賢治としては教師をやめて制約のない所で自由にこいつをやってみたいと思つたことも動機の一つだったろう。じじつ劇上演の予定があつた。

しかし劇団旗上げのためには、まだまだ勉強せねばならぬことが山ほどあつて、そのためには東京へ出たい、と考えていた。十四年の十二月二十三日には詩の雑誌を作っている若い友人の森佐一にあてて、「学校をやめて一月から東京へ出る筈だったので。延びました。」

夏には村に居ます」

といい、十五年四月四日、やはりに森に、

「学校をやめて今日で四日木を伐つたり木を植ゑたり病院の花壇をつくつたりしてゐました。もう厭でもなんでも村で働かなければならなくなりました。東京へその前ちよつとも出たいのですがどうなりますか。」

と東京へ出たいを繰り返している。目的は、実際に後で東京へ出た時に彼がしたことを見ればわかるように、童話劇や詩を創作し上演するためだった。

いわゆる羅須地人協会の時代である。それは普通、農に生きる意義を生徒に説き聞かせる自分が、俸給生活者であるという矛盾に耐えられず、「農民として彼らとともに生きることを決意した」「当時の農村は、農業恐慌と冷害による凶作とで窮乏し、希望のない灰色の労働に、農民たちは皆一様に疲れていた。賢治はそうした農村を変革し、農民たちを救わんと考えたのであつた^①」といわれる。しかし、大正十五年

四月一日の『岩手日報』でも彼はインタービューに答えて、「現代の農村はたしかに経済的にも種々行きつまつてゐるやうに考へられます、そこで少し東京と仙台の大学あたりで自分の不足であつた『農業経済』について少し研究したいと思つてゐます。そして半年ぐらゐはこの花巻で耕作にも従事し生活即ち芸術の生がいを送りたいものです」と言つたように、研究こそ「農業経済」で農村救済に關係ありそうだが、話の主眼は一年の半分百姓をして、生活即ち芸術を目ざすところにあつた。だから続けて幻燈会、レコードコンサート、農作物交換会などをしていと言つた。賢治は本来は隔たりのある「本当の百姓になる」といふと、素人の「農民劇団を創る」ことを引き寄せ、二つを一つと考へていた。

冒頭に掲げた保阪あて書簡207は、あたたかな泥水に足腕をひたして水口を繕つたりすることを願うといふので、「本当の百姓になる」ことだけが強調されているように見えるが、それだけではないだろう。だいいちこれは水田作りのイメージだが、賢治は自分では水田は作らなかつた。虚構だつた。

へいろいろな辛酸の中から青い蔬菜の毬やドロ木の閃きや何かを予期します」には、百姓をするだけでは満足できない心が出ていよう。「青い蔬菜の毬」とは彼の作つたキャベジ、白菜、花キャベツ（カリフラワー）、雪菜などだろうが、ヘドロの木の閃きとは、夏「成熟した朔果から綿毛を帯びた種子を飛散させる」（広辞苑）ドロの営み、それは宇宙の生の閃きだから、キャベジもキャベツそのものでなく、キャベジの語りかけるもの。それを予期するとはそれを受けとめるすべ

を考へていることだ。何に。劇や童話や詩に、である。辛酸が肉体の糧たる農産物と精神の糧たる芸術を生む。「生活即ち芸術の生がいの」はこれである。

「おれたちはみな農民である ずゐぶん忙がしく仕事もつらい もつと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい」

「曾つてわれらの師父たちは乏しいながら可成楽しく生きてゐた」
そこには芸術も宗教もあつた / いまわれらにはただ労働が生存があるばかりである / 宗教は疲れて近代科学に置換され然も科学は冷く暗い / 芸術はいまわれらを離れ然もわびしく墮落した / いま宗教家芸術家とは真善若くは美を独占し販るものである / われらに購ふべき力もなく 又さるものを必要とせぬ / いまやわれらは新たに正しい道を行き われらの美をば創らねばならぬ / 芸術をもてあの灰色の労働を燃せ」（「農民芸術概論綱要」）

これが。プロレタリア意識はあるが、階級闘争へと向かわず、芸術創造へ向かう。労働が、科学と宗教とに結びつき、芸術を生む。賢治のいう「本当の百姓になる」とは、これだつた。

その場所が羅須地人協会である。「賢治は、花巻川口町下根子の宮沢家別宅で独居自炊の生活に入つた。別宅は北上川の流れの見える高台の上にあつて、周囲は松の林である」。

家の周囲と崖下の砂畑を開墾して西洋草花と西洋野菜を作り、レアカーに積んで売りに行く。十五年六月に教え子の菊池信一が訪ねると賢治は窓ぎわの机にもたれてぐっすり眠つていた、「陽にやけた顔とあみ襯衣を透してあらはにみえる黒い肩、蚊に刺されて無数の黒点いっ

ばいな腕、破れたかゝとの穴を反対に上にして穿いてある靴下のその穴からみえるのは、多分鋤でもあらう大きな切傷に沃丁^{ヨウヂン}が塗られ、私は思はずも驚かざるを得なかった。」開墾の苦しみを語り、「先生は片手を腰の帯革にさし右手に原稿をとり上げて」詩を朗読した。「一坪の台所で焦げた冷めたい御飯に汁を灌^{そそ}ぎ灌^{そそ}ぎ砕き乍ら、原形そのまゝの沢庵漬を左手に噛^かじり噛^かじり、美味しかった夕飯を戴いて」二階の書齋でやがて生まれる羅須地人協会の話になる。設立の日を旧盆の十六日とし、農民祭日とする、会員には田園劇団の役者の大部分が加わる、ヴァイオリンの上手な者、フルート、マンドリン、木琴や詩の好きな者、皮帽子、農民服の研究者、ルパシカの紐の考案者、芝居の筋書の暗記の早い者など。そして菊池は賢治の意図を考える、「過去の時代に還ると云ふのではなく、次の来るべき物々交換の世界を描いたものではなからうか——東北地方の半年は殆ど雪に閉ざれてゐる。此の間被服の製作なり、食糧品の加工なり、又は美術工芸品の製作なり、研究しやうでは立派にひとつの仕事として完成」される余地があると。³ここには賢治の一生を通じて変らぬ農村工業化への興味と、当時の社会主義への親近感とが共に見られるようだ。

こうして未来に向いた理想郷建設の第一歩をふみ出したが、その食事は大変な粗食であつたことが、右以外にもさまざまな証言から知られている。——「井戸端に行き釣瓶を引き上げた時、ザルも一緒に釣りあがつて来た、ザルの中にお飯が入つてゐる、……お飯は一夜井戸の水気を充分に含んで丁度水で洗つたやうにサクサクしてゐる、お皿には蒿^{ちぎ}にソースをかけ、……」（白藤慈秀）「そばに赤くなつて居る

トマトを四つ五つナイフで採つて私にくれた。そして先生は井戸から飯をとりあげ井に盛つて醬油をかけ、そして私にすゝめるので二人で食べた」（平来作）「夏頃、こいというので桜に行ったら玉菜（キャベツ）の手入をしていた、昼食時だったので中に入ったら私にゴマせんべいをだした。賢治は米飯を食べている、『これ、あめたので酢をかけてるんだ』と言つたのが印象に残っている。」（川村尚三）⁴

過労とこんな粗食が体をこわして倒れる前に、念願の東京行きは二度果している。

百姓をしながら短歌や俳句を作るといった金のかからぬものでなく、彼の選んだのは金のかかる、バタ臭い、村民の感情を逆撫でするようないわば前衛演劇で、そのために東京行きは必要だつた。とにかく「教師をやめて本当の百姓になる」の「本当の百姓」の中身が、普通の解釈と賢治の意味とは、過去と未来ほど違つていた。

銀河のこころ

212 大正十四年九月二十一日 宮沢清六あて

お便り拝見しました。大演習でも一度熱く燃えなければならぬ訳ですが、どうか折角自重してください。こちらは変りはありません。先頃は走つてやつと汽車に間に合ひました。あの夕方の黒松の生えた営庭の草原で、ほかの面会人たちが重箱を開いて笑つたりするのを楽しく眺め、われわれもうすぐ濁つた赤酒を呑み、柔らかな風を味ひうるんだ雲を見ながら何となく談してゐた寂かな愉悅はいまだ

に頭から離れません。いろいろな暗い思想を太陽の下でみんな汗と
いっしょに昇華させたそのあとのあんな楽しさはわたくしもまた知
つてゐます。われわれは楽しく正しく進まうではありませんか。苦
痛を享樂できる人はほんたうの詩人です。もし風や光のなかに自分
を忘れ世界がじぶんの庭になり、あるいは惚として銀河系全体をひ
とりのじぶんだと感ずるときはたのしいことではありませんか。も
し四月まで居るやうならもちどきつと訪ねて行きます。

九月廿一日

宮沢清六は明治三十七年生、賢治より八歳下の弟で、盛岡中学一年の
時、高等農林三年の賢治と同じ家に下宿し、岩手山にも共に登る。の
ち在京中、賢治に頼まれて童話原稿を雑誌社に持ちこんだこともある。
兄が死ぬ時、この原稿はみんなお前にやるから、どうしても出したい
という本屋があつたり出してもよいと言われ、その言葉どおりに原稿
を守つて、今日の賢治評価の基礎を作つた。「雨ニモマケズ」の発見者
でもある。

弟を弘前の歩兵第三十一聯隊に訪ねた時のことを、ふりかえつて彼
に語つた美しい手紙である。もう覚えてゐる日本人も少なくなつた、
軍隊の面会風景である。衛兵所に敬礼をしてようやく出て来た身内の
兵士を囲んで、営庭のあちこちで、親兄弟や友人は、さあ食べろ食べ
ろと重箱につめてきたおはぎやごちそうを、兵士にすすめてゐる。そ
の人々の喜びをわが喜びとしながら、賢治たちもへ柔らかな風を味ひ
うるんだ雲を見ながら話している。へ暗い思想を汗といっしょに昇華

させたあとの楽しさとは、労働の生む楽しさで、わたくしも知つて
いる、風や雲と共にある楽しさだ。へ楽しく正しく進むとは苦痛を享
樂すること、そののできる人が本当の詩人だ。風や光の中に自我を
超越し、自然と融合してしまふ。世界が自分の庭になる、いや銀河全
体がこの自分なんだと感ずる時は楽しいではないか、という。

これは、賢治がこの年に書いた「農民芸術概論綱要」の農民芸術の
製作、綜合の部のいわば手紙版である。そこでは「なべての悩みをた
きぎと燃やし なべての心を心とせよ / 風とゆききし 雲からエネ
ルギーをとれ」と言つた。また、

「まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちらばら
う / しかもわれらは各々感じ 各別各異に生きてゐる / ここは
銀河の空間の太陽日本 陸中国の野原である …… / つめくさ灯
ともす宵のひろば たがひのラルゴをうたひかはし / 雲をどよも
し夜風にわすれて とりいれまぢかに歳よ熟れぬ」 / 詞は詩であ
り 動作は舞踊 音は天樂 四方はかがやく風景画 / われらに理
解ある観衆があり われらにひとりの恋人がある / 巨きな人生劇
場は時間の軸を移動して不滅の四次の芸術をなす ……」

といい、「われらに要るものは銀河を包む透明な意志 巨きな力と熱で
ある」と結ぶ。要するに、風や雲と通ずる、銀河の中の銀河的人生は、
当然に苦痛を伴なおうが、それをも享樂すること、人生がそのまま
芸術になる、という。賢治の人生がそうだったように。

これが賢治のいう生活即芸術の究極の姿だ。自らいう「宮沢賢治一
九二六年のその考」を、一年前に弟にやさしく説いたのがこの手紙だ。

この手紙は、少し前の八月十四日に森佐一にあてて、森の詩をほめて早く岩手の詩のアンソロジーを作るようにと励ました手紙と一対をなすものでもある。そこでは方向を逆にして、芸術から生活が透けて見えるという。

「あなたの作品の清浄さうつくしさ、いろいろな模様のはひった水精のたまを眼にあててのぞいてゐるやうな気がします。早く一冊にしてください。わたくしの微力からたとへそれが小さいものであらうとも、小さくても一頁づつがふしぎな果樹園のやうになった本ができます。」

童話「貝の火」の宝珠のような水晶を覗くと、美しい模様が流れたり火花が揚つたりするばかりでなく、不思議な果樹園が現われる、そんな詩集が欲しいという。水晶を珍重するなんて子供のような賢治だが、詩集の一頁一頁が果樹園というちよつとハイカラな労働を伴う農民の生活を叫び覚ます。弟への手紙にあるように汗を流す生活がそのまゝ芸術であるならば、芸術からもまた生活が透けて見えるものなのである。

さらにあの212の手紙は、少し後の十二月一日清六あて手紙とも関連している。この時期に清六あて手紙は集中してあるが、それは清六が兵隊にとられて弘前にいたばかりでなく、手紙の内容とも関係している。つまりここに書かれたようなことが二人の間でずっと話し合われていたと思われるのだ。

「仕事の計画はいかにも実務的ではつきりしてゐてひじやうに賛成です。／わたくしも多少見当の付く方面ですから精いっぱいお手伝ひ

します。お父さんも大へんよろこんでゐます。／恐らくきみはその新鮮な熱情と透明な企画とでわれわれのしばらく寂れた家（わたくしの勝手から起った）をはなばなく楽しくしてくれるだらうとおもひます。」

清六は家を継いだらこれこれの商売をしたい、と言って来たのである。（事実、翌年三月除隊してから、建築材料、金物、電導材料などを扱う宮沢商会を始めた。）それに大賛成だ、父も喜んでゐる、私も手伝う、君は私のさびれさせた家を再興してくれるだらう、と賢治は喜び励ましてゐる。このすぐ前には、

「畠山校長が転任して新しい校長が来たりわたくしも義理でやめなければならなくなつたりいろいろごたごたがあつたものですからつい遅くなつたのです。」

と返事のおくれた言訳をしたが、義理でやめるのは全くウソというわけでもなからうが、心の真実からは遠いだろう。清六が兵役も終えて家を継いで新しい商売を始める。これで自分は跡継ぎの責任を解かれ自由の身となつて、好きなことに思いきり打ちこめる。その喜びが、すでにその話の始まつてゐる九月の手紙にも底流してゐて、われわれは共に労働の汗を流して、銀河系と一つの楽しい氣持を味わおう、と弟をも自分をも祝福したのである。

下根子桜での独居自炊は、第二の家出でもあつて、それには清六が自立し、彼に家を譲る見きわめのつくことがどうしても必要だった。

先生は全部それでいいとほめてくれました

221 大正十五（一九二六）年十二月十二日

宮沢政次郎あて

今日は午后からタイピスト学校で友達になったシーナといふ印度人の紹介で東京国際倶楽部の集会に出て見ました。あらゆる人種やその混血児が集って話したり音楽をやったり汎太平洋会のフォード氏が幻燈で講演したり実にわだかまりない愉快な会でした。殊に私は少し倶楽部の性質を見くびってこちらで買った木綿の仕事着を着て行ったのでしたが行って見ると室もみな上等の敷物がありみんなな礼装をしてゐましたので初めは少々面くらひましたが退くにも退かれず仕方なく臆面もなくやつてゐましたら、そのうちフィンランド公使が日本語で講演しました。それが尽く物質文明を排して新しい農民の文化を建てるといふ風の話で耳の痛くないのは私一人、講演が済んでしまふと公使はひとりあきらめたやうに椅子に掛けてしまひみんなはしばらく水をさされたといふ風でしたが、この人は名高い博言博士で十箇国の言語を自由に話す人なので私は実に天の助けを得たつもり、早速出掛けて行って農村の問題特にも方言を如何にするかの問題など尋ねましたら、向ふも椅子から立っていろいろ話して呉れました。やつぱり著述はエスペラントによるのが一番だとも云ひました。私はこの日本語をわかる外人に本を贈りもう一度公使館に訪ねて行かうと思ひます。どうか土蔵から童話と詩の本を各四冊づつ小包でお送りを願ひます。

いままで申しあげませんでしたでしたが私は詩作の必要上樓で一人でオル

ガンを毎日少しづつ練習して居りました。今度こっちへ来て先生を見附けて悪い所を直して貰ふつもりだったのです。新交響楽協会へ私はそれらのことを習ひに行きました。先生はわたくしに弾けと云ひわたくしは恐る恐る弾きました。十六頁たうとう弾きました。先生は全部それでいゝ、といつてひどくほめてくれました。もうこれで詩作は、著作は、全部わたくしの手のものです。どうか遊び仕事だと思はないでください。遊び仕事に終るかどうかはこれからの正しい動機の固執と、あらゆる慾情の転向と、倦まない努力とが伴ふかどうかによつて決まります。生意氣だと思はないでどうかこの向いた方へ向かせて進ませてください。実にこの十日はそちらで一ヶ年の努力に相当した効果を与へました。エスペラントとタイプライターとオルガンと図書館と言語の記録と築地小劇場も二度見ましたし歌舞伎座の立見もしました。これらから得た材料を私は決して無効にはいたしません、みんな新しく構造し建築して小さいながらもなといつしよに無上菩提に至る橋梁を架し、みなさまの御恩に報いようと思ひます。どうかご理解をねがひます。

十二月十二日

これが大正十五年十二月に賢治が勉強のために上京した折に、父に報告した手紙の一つである。父に対すると、氣張って背伸びをした物言いをするのは、中学時代と少しも変っていない、倶楽部の性質を見くびって作業衣で行ったので敷物・礼装に面くらったが、臆面もなくやっていたところなど。このインターナショナルの雰囲気は、

童話的である。「ベジタリアン大祭」や「ポラーノの広場」あるいは「セロひきのゴーシュ」の演奏会の場面など、人々の集合を描いて国や村や町を超えた空気を出しているところがそっくりである。そこへ作業衣で行くというのも、見合も作業衣で通した賢治らしいが、物質文明の排除とか、新しい農民の文化、エスペラントなど、普通の「百姓」からするとチンプンカンプンで齒の浮くような話題を喜んでいる。童話的とは、一面現実から浮き上ったことでもある。

新交響楽協会へ音楽の先生を訪ねて試験されるころ、へたくし〜が初めは恐る恐る、とうとう十六頁弾ききると、へ先生は全部それでいい、といってひどくほめてくれましたは嘘だろう。賢治はセロは下手だったという。オルガンも上手とは誰も言っていない。仲間との器楽合奏もその選曲から見ると「下手も大下手」（井上ひさし）。先生の前で十六頁弾いたのは教則本の類であろう、残された作曲を見てもプリミチブなものにすぎない、技術的な知識は殆どなかったといわれている。かりにほめられたのは嘘でなかったとしても、賢治は現実を童話的に書いてしまったのだ。「ペンネンネン・ネンネン・ネネムの伝記」でフウファイボー博士が、「グスコブドリ」の伝記でクローボー大博士が主人公をほめてくれる原形はこれだった。

何のために。父にわが仕事を納得させるために、である。へ遊び仕事〜に終わせないための三条件をあげ、東京の十日間で花巻の一年に当る勉強をした。これを見事にせず、皆を幸せに導く橋作りをしたいという。つまり何を言っているのかといえば、無心である。

じつはこの手紙は三日後の十二月十五日父あて手紙とセットになっ

ているのである。

「御葉書拝見いたしました。小林様は十七日あたり花巻へ行かれるかと存じます。わたくしの方はどうか廿九日までこちらに居るやうおねがひいたします。

図書館の調べものもあちこちの個人授業も訪問もみなその積りで日程を組み間代授業料回数券などみなさうなうって居りましていま帰ってはみんな半端で大へんな損でありますから今年だけはどうか最初の予定の通りお許しをねがひいます。それでもすゐぶん焦って習ってゐるのであります。毎日図書館に午後二時頃まで居てそれから神田へ帰ってタイピスト学校数寄屋橋側の交響楽協会とまはって教はり午後五時に丸ビルの中の旭光社といふラヂオの事務所まで工学士の先生からエスペラントを教はり、夜は帰って来て次の日の分をさらひます。一時間も無効にしては居りません。音楽まで余計な苦勞をするとお考へてありませんがこれが文学殊に詩や童話劇の詞の根底になるものでありまして、どうしても要るのであります。もうお叱りを受けなくてもどうしてこんなに一生けんめいやらなければならぬのかとじつに情なくさへ思ひます。」

早く帰れとの父の命令に接して、今帰ると損になる、どんなに一生懸命やっているかを説く。この日程は時間的にも無理かと思うが、それはどんなにお金がかかるか、でもある。続けて「今度の費用も非常でまことにお申し訳ありませんが」その上、靴が、ふだん着も、授業料も、毛布を、心理学や科学の廉い本を、買ったたり払ったたりした、芝居も見たい、どうか今年だけでも小林様に二百円おあづけをねがひます」

と追加請求している。後出の小学校の女先生の月給の約四倍である。井上ひさしによると東北の農村を回って娘を買っていた人買いの払う金が娘一人百二十円という時代である。

「いくらわたくしでも今日の時代に恒産のなく定収のないことがどんなに辛くひどいことか、むしろ巨きな不徳であるやうのことは一日一日身にしみて判って参ります」と言い訳をしたり、「わたくしは決して意志が弱いではありません。あまり生活の他の一面に強い意志を用ひてゐる関係から斯ういふ方にまで力が及ばないのであります」と居直ったりしながら。だから、農具でも何でも売って清六の手伝いができるように計って下さい、と父に頼んでいる。

それなら教師をしながら夏休み冬休みなどに上京し、そうした勉強をすればいいと普通なら考えられるが、公から俸給を貰ってそれを私事に使うのは彼には苦痛だったのだろう。その異様な潔癖ぶりは一種のお坊っちゃん根性で、高等農林の助手時代、俸給や郡からの土壤調査の手当を貰うことを断ったり、碎石工場時代、工場主に損をかけてはすまないが、父にはいくら損をさせてもいいと思つたのもこれである。だが、これが嵩じると、今度は父のために働かねばならぬと身体を壊すまで働く。父の金を消費すると、父のために働く、この二つがシーソーのように交代したのが賢治の一生だった。

県会 は 南 の 高 気 圧 へ 感 謝 状 を 出 し ま す

240 昭和三（一九二八）年七月初め 伊藤七雄あて（下書）

お手紙ありがたく拝見いたしました。

はなはだ遅くなりましたがその節はいろいろと厚いおもてなしをいただきましてありがたうございました。先月の末おきまり通り少し眼を患ひながら帰つてまわりました。畑も庭も草ばうばう、くわくこうはまだやって居り、稲はもうすつかり青い檜葉になつてゐました。水沢へは十五日までには一ぺん伺ひます。失礼ながら測候所への序でにお寄りいたしまして、ご安心になるところ、ならぬところ、正直に申しあげて参ります。

花のたねはみんなありふれたものばかりですが、そのうちすこし大事のところをお送りいたしますからあれで充分お手習ひをねがひます。次にはかの軟弱不健全なる緑廊は雨で潰れるかはじけるかいたしませんか。こちら一昨日までは雨でした。昨日今日はじつに河谷いっぱいの和風、県会 は 南 の 方 の 透 明 な 高 気 圧 へ 感 謝 状 を 出 し ま す。

〈備考〉本書簡には更に三種の下書が存在し、その一つの末尾は次のとおり。「一昨日までひどい雨でしたが昨日からすっかり天気になりました。河谷いっぱいの和風です。今年の稲の檜葉も伸びてことによつたら秋には祭の軽業師に村の人たちが栗やあげびをどうかたべてくださいと言って投げつけるあんな情景がまた来るかと思つたりして居ります。どうぞお大切に。」

伊藤七雄は明治三十一年生。水沢の資産家で事業家の伊藤祐吾の末弟

で、肺結核のため伊豆大島に療養中、農芸学校開設を思い立ち、妹チエを伴って賢治を訪問して助言を乞い、大島へも呼んだ。応えて賢治は三年六月に大島を訪ねた。学校は六年四月に開校したと思うように生徒が集らず、間もなく七雄の死によって解散した。

これは昭和三年六月の大島行きの後で書いた礼状の下書である。その前に昭和二年のことをのべておきたい。

書簡集を見ると、まず一月三十日に、以前国民高等学校で賢治の講義を聞いた伊藤清一に、地元での農業講話の講師を引き受ける件をとわっている。「只今の仕事が学校や役所へ挑戦的でありますので……不遜の識そしりを免れません」と。自分でも知っていたのだ、村々農村共同体ことに地元の人々との違和感を。それと、この時期は米作り農業以外の別のことに興味があつたのだろう。

一月中に教え子の斎藤貞一に、病身の君に合うこんな仕事を見つけた、「外国の例で勘定係り (Counter) といふもの」で、耕地の面積を計算し旋肥量などを計算する仕事で、「外国で立ってる限り日本でもだんだん立つやうになるだらうと考へます」というのだが、これなども賢治が日本の百姓の実情を知らない、ハイカラ坊っちゃんである一例だろう。

三月ばらの苗をわけ、四月花巻温泉遊園地の南斜花壇を設計し、十月レコード交換会の紹介状を書く。

「何分レコードも年々大量廉価に出来るやうになりましてやがては雑誌乃至新聞のやうな調子に扱はれるかとさへ存ぜられますので古いものを聴かないで蔵って置くよりは古いもの同志或は相当の割合

で交換した方が得かと思はれます。」

昭和二年という年、花巻という東北の田舎町に一体何枚のレコードがあるか、凡そ見当がつこうに、レコード交換が事業として成立つと考える賢治は相当に浮き上っている。

この昭和二年の年の始めが羅須地人協会の最盛期だった。賢治は東京の空気を吸って戻ったばかり、

「その頃の冬は楽しい集りの日が多かった。近村の篤農家や、農学校を卒業して實際家で農業をやつてゐる真面目な人々などが、木炭を担いできたり、餅を背負ってきたりしてお互先生に迷惑をかけまいと、熱心に遠い雪道を歩いてきたものである。短い期間ではあつたが、そこで農民講座が開講されたのである。大ぶいろいろの先生が書いた植物や土壌の図解、あるひは茶色の原稿用紙に青く謄写した肥料の化学方程式を皆に渡して教材とし、先生は黒板の前に立つて解り易く説明をしながら、皆の質問に答へたり、先生は自分で知らないその地方の古くからの農業の習慣等を聞いて居られた。みんな丸い椅子に腰かけたが、椅子の足りない時には蜜柑箱に腰を下したりして兎に角皆んな気楽にしてゐた。部屋は階下の廊下の西側で壁には農学校の劇で使用した青色の木綿の幕を張って、縄で一尺位宛の間隔でそれを押へ、南と北はガラス窓で天井は高かった。床には防腐剤が塗つてあつたため、いつまでもその匂がしてあつた。昼食は各々持参の弁当や握飯を開いて食べたが、私達は湯を沸したり、大豆を煎ったりした。先生は皆に食べさせたいと云つて林檎とすゝめを振舞つたり、そしてオルガンを弾いたりしたのである。或日午

後から芸術講座を開いた事がある。トルストイやゲーテの芸術定義から始まって農民芸術や農民詩について語られた。従って私達はその当時のノートへ羅須地人協会と書かず、農民芸術学校と書いて自称してゐたものである。」

物々交換会をやり、農閑期を利用して必要品を副業で自足自給する計画もあり、春になると町の下町に二間に一間の所を借りて農事相談所を開いた。

「その前に私達にも悲しい日がきてゐた。それはこのオーケストラを一時解散すると云ふ事だった。……集りも不定期になった。それは或日の岩手日報の三面の中段に写真入りで宮沢賢治が地方の青年を集めて農業を指導して居ると報じたからである。……当時は思想問題はやかましかった……先生は其の晩新聞を見せて重い口調で誤解を招いては済まないと言ふ事だった。セロは一時花陽館と云ふ映画館に身売した。」(伊藤克己「先生と私達」)

それは、「氏は今度花巻在住の青年三十余名と共に羅須地人協会を組織しあらたなる農村文化の創造に努力することになった」趣旨は現代の悪弊と見るべき都会文化に対抗し農民の一大復興運動を起こすのは主眼で、同志をして田園生活の愉快を一層味はしめ原始人の自然生活にたち返らうといふのである」そのために物々交換、農民劇、農民音楽をやる、「第一回の試演として今秋『ポランの広場』六幕物を上演すべく夫々準備を進めてゐるが、これと同時に協会員全部でオーケストラを組織し、毎月二三回づゝ慰安デーを催す計画で」云々と報じられた。これが治安当局の注意を惹き、労農党へのシンパ活動もあつて警

察に事情聴取されらしい。

二月一日のこの新聞記事が機縁となつて、この後協会に賢治の仕事の中身が変る。農民と農民芸術の興隆という初期の大目標に代つて、肥料相談所を設けて農民に無料で肥料設計をするという小目標が立てられた。賢治の米作り農民への献身はここに始つたのだろう。

断つた講演もどんどんするし、「数日前君の所謂店を訪問したるに箱の様な代用机三四脚の腰掛け其処で十四五名の農家は順番に設計の出来るのを待つて居つた、非常に丁寧な遠慮深い農家達だと思つたに、是は皆な無料設計で用紙なども自宅印刷なのであつた。自己を節するに勇敢で他に奉ずる事に厚いと噂に聞いて居る宮沢君は世評の如く誠にかざらざる服装で如何にも農民の味方の感があつた」と昭和三年だ(8)が報じられている。だが彼は「農民の味方」ではあつても農民ではなかつた。ここでも「非常に丁寧な遠慮深い農家達」とある。

井上ひさしはいう、「花キャベツだのチューリップだのを積んだリアカーをひくぱりとした作業服の農民、まさに賢治童話の登場人物ではないか。その彼が相次ぐ凶作で疲れ切つた、陰気な町を行く……。このへんが賢治の生活感覚の滑稽なところだ。それに加えて彼は売れ残りをただで配つて引き揚げる。農民は作物をただでくれてやつたりはしない。」「協会を閉じざるを得なくなつた理由はいくつもあるが、最大の理由は、救おうと思つた農民から協会が白い目で見られたこと(9)にあつた。」

それを具体的にいうと、トシ子の死んだ家へ「また(また)と感じたのです」今度はむすこがやつて来た。それで「えたい」のしれない『ず

ほうだい』な事をやりはじめた。これは嫌だ、嫌なことになると思い込んだものらしいのです。」

「野菜や花を積んだリヤカーをひく、先生の姿をだんだん見なれた向小路の人達は、何不自由のない金持ちの後とり息子さんなのに、何が面白くて車を引く様なことをするのだろうか、よほど変った人なんだな、と話し合っていました。」

帰りのリヤカーをのぞき見た一人は、『まんず、米つこ買ってくるんすじゃ。』土蔵いっぱい米を積んでいる地主の息子が、米の一升買い、二升買いをしているらしい。その米袋をたしかに見た、と云うのです。……

リヤカーに積まれた白菜も驚きの一つでした。『あの白なおっきな株っことは何だべ、きだいな野菜なもんだ。』結局は『外国ものの野菜だべ。』と云う事に落着いたものの、今度は『どこさ持つて行くべ。』と又論争がはじまるのです。……しかしこのおかみさん達の中で、一人も『それ、売るのはすか。』と先生に直接話しかける人がついついありませんでした。」

だから、肥料設計でも、「化学肥料」というものを耳新しく聞いた人達が、その場では多かったのです。切角教えていただいても、高価な肥料代と、それにくっついてくる様々の危惧感から、すぐにはついていけない人も相当あったのが事実です。」⁽¹¹⁾という。

なお昭和二年一月に、同人詩誌『銅鑼』で文通のある草野心平が、アメリカ式大農園を夢想した「宮沢農場」で働かせてもらおうと家出したが、乗った列車が新潟行きだったために会えずに終わったという。

もし彼が羅須地人協会に来ていたら、ゴッホとゴーガンのアルルでの共同生活のようなものが、日本でも実現していたかもしれない。⁽¹²⁾

こうして昭和三年になった。春までは農事講演や肥料相談をし、六月、父の要求からであろう、自分が就くべき職業候補として水産加工（鰯など）やその農産物との関連（昆布と松の葉など）を調べながら、仙台、水戸を経て上京、伊藤七雄・チエ兄妹に呼ばれた大島へ渡り、二泊して帰った礼状が冒頭の手紙である。

「畑も庭も草ばうばう、くわくこうはまだやって居る」に、一ヶ月近く留守にした羅須地人協会の情景と彼の孤立が浮びあがる。大島では花壇の設計もしたので、豪雨で流れはしなかったかと心配している。そして「昨日今日はじつに河谷いっぱいの和風」以下の結びがじつに童話的である。現実を童話に書きかえてしまう想像力のすばらしさ。別稿の末尾へ秋には祭の軽業師に村の人たちが栗やあげびを……の部分も、好天による豊作と村人の喜びを想像した美しい文章だ。その上ハイカラ好きの賢治が村の共同体と親和しているさまが注目される。この辺から彼は自分の理想の農民でなくとも現実の農民を肯定し始めたのだろうか。

大島行きは長詩「三原三部」の世界である。第一部は船から見た離れゆく東京湾の景。第二部は大島の火山灰地での畑作りと庭園作り。第三部は船で島を離れる。「もういま南にあなたの島はすっかり見えず」のあなたはチエか。「たうとうわたくしはいそがしくあなた方を離れてしまったのです」のあなた方は兄妹か。チエが賢治の意中の人であったとは森莊己池（佐一）の力説するところで、賢治は昭和六年に森を

岩手日報社に訪ねて、わたしは結婚するかもしれないと告げた。森は賢治没後チエを訪ねて、いやがるチエに貴女は賢治の思われ人だったと告げ、「三原三部」にその証拠があるという。しかしそれはそうとも否ともいえる詩の断片にすぎない。

藤原嘉藤治にいわせると「彼は絶えず女性を求めてゐた」というから、へ結婚するへは親しい友へのいわば口癖だったのだろう。

しかし「三原三部」の「踊るように軽快な気分」⁽¹⁵⁾があの手紙にもまだ残っているから、協会の後退で気弱になった賢治にもこの時何かしら幸福の予感のようなものがあつたのかもしれない。

しかし賢治を待っていたのは長雨の後のへ河谷いっぱいの和風で、けでなく、イモチ病の発生と早魃だった。その奔走と六月以来の疲れとから八月十日に賢治は倒れる。病名肋膜炎・両側肺浸潤、父の家へ戻って病臥した。羅須地人協会はこの日で終つたと見られる。

九月二十三日に農学校の教え子で岩手師範に入った沢里武治にあてた手紙に、

「八月十日から丁度四十日の間熱と汗に苦しみました、やっと昨日起きて湯にも入り、すっかりすがすがしくなりました。六月東京へ出て毎夜三四時間しか睡らず疲れたまゝで、七月畑へ出たり村を歩いたり、だんだん無理が重なってこんなことになったのです。演習が終るころはまた根子へ戻って今度は主に書く方へかゝります。」

こうはいったが、だいたい翌年の昭和四年いっばい病臥は続いた。

われらにひとりの恋人がある

252 a 日付不明 高瀬露あて（下書）

お手紙拝見いたしました。

法華をご信仰なさうですがいまの時勢ではまことにできがたいことだと存じます。どうかおしまひまで通して進まれるやうに祈りあげます。そのうち私もすっかり治つて物もはきはき云へるやうになりましたらお目にかゝります。

根子では私は農業わづかばかりの技術や芸術で村が明るくなるかどうかやつて見て半途中で自分が倒れた訳ですがこんどは場所と方法を全く変へてもう一度やつてみたいと思つて居ります。けれども左の肺にはさっぱり息が入りませんしいつまでもうちの世話にばかりなつても居られませんかまことに困つて居ります。

私は一人一人について特別な愛といふやうなものは持ちませんし持ちたくもありません。さういふ愛を持つものは結局じぶんの子どもだけが大切といふあたり前のことになりますから。

尚全快の上。

高瀬露、賢治の知り合つた女性のうち最も大切な人とわたしには思われるこの人にあてた（と見られる）手紙の下書が幾つか残されている。何故大切かといえば、「賢治をめぐる四人の女性」などといわれるが、初恋の看護婦はその名前さえ特定できず、いわば跡かたもなく、伊藤チエはチエ自身があの人は「結婚などの問題は眼中に無い方」と言つた通りで、淡い気持はあつたかもしれないが全く問題にならず、妹

トシは近年発見されたというその「自省録」⁽¹⁶⁾によれば、高等女学校時代音楽の男教師に憧れた普通の女の子であつて、そこには兄という語も賢治の名も一度も出て来ない。賢治の妹への愛は彼女の死を契機に溯つて作られたもの、とこう考えてくると、賢治と愛を語ったのではないが、少くとも愛について語り合つた唯一の女性、高瀬露の存在は非常に重要な意味を持つ。

これはまだ相見る前の手紙だが、賢治は自分の病状についても、仕事の現在についても相手が女ということもあつてか安心してうち明けている。へわづかばかりの技術や芸術で村が明るくなるかどうかやつて見て半途で倒れた^レはその通りで、^レが肥料設計などを^レが芸術^レが農民劇やオーケストラなどを指すのは明かだが、へこんどは場所と方法を全く変へてもう一度やつてみたい^レが、沢里にいったように^レ書^レく方へかかる^レを指すのか、それとも大島農芸学校への発展的解消を指すのか、あるいは第三の道があつたのか、わからない。ただ愛について、へじぶんの子どもだけが大切といふあたり前のことになる因習的な愛と、自分の愛とは違ふのだとはつきり言っている。賢治が結婚できなかった最大の理由はこれであろう。女性に営巢本能という排他的・独占的な愛がある以上、一緒にはゆけない。わが愛は父祖の収奪の償いとしての民衆への愛なのだから、という気持であろう。

そういう現実の女性の愛を、いわば女性というものの本当の姿を賢治にはつきり教え、そのことで賢治自身の道をさし示してくれたものがこの手紙の相手、高瀬露だつた。

それにしてもこの手紙は何年に、誰にあてて書かれたものか。新修

全集では昭和四年に置かれている。病状からすると、三年八月に倒れてしばらく後の四年がふさわしい。しかし高瀬露が下根子桜の地人協会に賢治を足しげく訪ねたのは、ずっと前だ。賢治と数人の青年たちの集りに、階下でカレーライスを作つて二階の皆の前に運び、賢治が自分は食べる資格がないから食べないと言ふと、怒つて階下へ下りてオルガンを高らかにひき出したというの⁽¹⁷⁾も、青年たちが集つて来た羅須他人協会の盛時でなければならぬ。『新潮日本文学アルバム』の評伝（天沢退二郎）では昭和二年秋頃からとしている。『年表作家読本』も推定としながらもやはり昭和二年の夏頃からとしている。『宮沢賢治の肖像』の森莊己池は、「一九二八年の秋の日、私は下根子を訪ねた」その途中、（賢治に会つて来て）上気した彼女とすれちがつた。その頃いろいろあつたが、『昭和三年に自然に終末を告げた』八月病臥の年譜が語るように、という。一九二八年は昭和三年だから、これは前後撞着している。

やはり高瀬露の来たのは、大正十五年か昭和二年頃であろう。だが、その頃は賢治の最も元氣な頃で、この手紙の病状と矛盾する。ひよつとするとこの手紙の相手は、高瀬としたのは全集の誤りで、別の女性か。（愛について語っているのだから男性ということはない。当時男は愛などは口にしなかつた。）それに高瀬はクリスチャンなのに、ここにはへ法華をご信仰とある。以上疑問として提示しておく。

252 c 日付不明 高瀬露あて（下書）

重ねてのお手紙拝見いたしました。独身主義をおやめになったとの

お詞は勿論のことです。主義などといふから悪いですな。あの節とて教会の犠牲になつていろいろ話の違ふところへ出かけなければならんといふ時でしたからそれよりは独身でも明るくといふ次第で事実非常に特別な条件（私の場合では環境即ち肺病、中風、質屋など、及び弱さ）がなければとてもいけないやうです。一つ充分にご選択になつて、それから前の婚約のお方に完全な諒解をお求めになつてご結婚なさいまし。どんな事があつても信仰は断じてお棄てにならぬやうに。いまに科学がわれわれの信仰に届いて来ます。……さて音楽のすきなものがそれのできる人と詩をつくるものがそれを好む人と遊んでゐたいことは万々なのですがあなたにしろわたくしにしろいまはそんなこととしてゐられません。あゝ、いふ手紙は（よくお読みなさい）私の勝手にだけ書いたものではありません。前の手紙はあなたが外へお出でになるとき悪口のおつた私との潔白をお示しになれる為に書いたもので、あとは正直に申しあげれば（この手紙を破ってください）あなたがまだどこかに私みたいなやくざな者をあてにして前途を誤ると思つたからです。あなたが根子へ二度目においてになつたとき私が『もし私が今の条件で一身を投げ出してゐるでなかつたらあなたと結婚したかも知れないけれども、』と申しあげたのが重々私の無考でした。あれはあなたが続けて三日手紙を（清澄な内容ながら）およこしになつたので、これはこのまゝではだんだん間違ひになるからいまのうちはつきり私の立場を申し上げて置かうと思つてしかも私の女々しい遠慮からあゝ、いふ修飾したことを云つてしまつたのです。その前後に申しあげた話をお考へ

ください。今度あの手紙を差しあげた一番の理由はあなたが夏から三べんも写真をおよこしになつたことです。あゝ、いふことは絶対なすつてはいけません。……

高瀬の愛情告白の中に、私は独身主義をやめましたとでもあつたのだろう、それに対して、それは結構だ、自分のように特別の条件（肺病、中風、質屋、弱さ）がなければ、独身主義などはいけない、と自分を露悪的に示している。むろん自分を好いてはいけないということだ。

いまに科学も信仰の域に届く、と共に、好きな人といつしよには行けない、は、賢治的な思想で、「銀河鉄道の夜」初期形に、

「あゝ、さうだ。みんながさう考へる。けれどもいつしよに行けない。そしてみんながカムパネルラだ。おまへがあふどんなひとでもみんな何べんもおまへといつしよに苹果（りんご）をたべたり汽車に乗つたりしたのだ。だからやつぱりおまへはさつき考へたやうにあらゆるひとのいちばんの幸福をさがしみんなと一しよに早くそこに行くがいゝ、そこでばかりおまへはほんたうにカムパネルラといつまでもいつしよに行けるのだ。」

とあるところだ。

彼女の愛の告白に対して拒否の手紙を書いた、ああいう手紙は私の勝手に書いたのでなく、あなたの潔白を証明するために、あなたのために書いたのだ、という。わたしの本心でないと云つてゐるやうだ。へ私が一身を投げ出してゐるのでなかつたらあなたと結婚したかも知

れない」といったのは、はっきり私の立場を言おうと思ひながら遠慮したためこう言つてしまつたので、全く無考なやつだ。続けて三日手紙をよこしたり、写真を三べんもよこしたり、してはいけない。思うに、大正の女性としては高瀬露は、大胆な、情熱的な、自己の氣持をはつきりと出す性格で、しねしねしたチエよりずっと面白い人だ。賢治も彼女の申し出をきつぱりと断つてゐるようだが、よく読めばその裏に愛情がある。

これと同趣旨の下書きにはこういう、

「その他の点でも私はどうも買ひ被られてゐます。品行の点でも自分一人だと思つてゐたときはいろいろな事がありました。慶吾さんにきいてもらひなさい。それがいま女の人から手紙さへ貰ひたくな」といふのはたゞたゞ父母への遠慮です。これぐらゐの苦痛を忍ばせこれ位の犠牲を家中に払はせながらまだ心配の種を播く（いくら間違ひでも）といふことは弱つてゐる私にはできないのです。」

拒否の理由は、父母にこれ以上心配をかけたくない、家のこと生活のこと世間のことその他で心配のかけどおしだ、せめて女性問題はシロにしておきたいという。今日から見るとおかしいようだが、自然の縁からある女性を好きになるのは父母に心配をかけることで、父母の選んだ女性と結婚することが父母を安心させることだつた。

これなども自分は嫌いではないが、「まはりの関係で……やめなければなりません」といつてゐるようだ。

こんな下書きもある、自分は確固たる主義があつてしてゐるのでなく、質屋とか肺病とか中風とか（例によつて露悪）から、しかたなし

に世間と違つた生活のしかたをしてゐる、

「文芸へ手は出しましたがご承知でせうが時代はプロレタリア文芸に当然遷つて行かなければならないとき私のものはどうもはつきりさう行かないのです。心象のスケッチといふやうなことも大へん古くさいことです。そこで只今としては全く途方にくれてゐる次第です。たゞひとつどうしても棄てられない問題はたとへば宇宙意志といふやうなものがあつてあらゆる生物をほんたうの幸福に齎したいと考へてゐるものかそれとも世界が偶然盲目的なものかといふ所謂信仰と科学とのいづれによつて行くべきかといふ場合私はどうしても前者だといふのです。……まあ中学生の考へるやうな点です。ところがそれをどう表現しそれにどう動いて行つたらいい、かはまだ私にはわかりません。」

時代との齟齬と文芸上の悩み。宇宙意志は確信するが、それもどう表現しどう行動したらよいかわからない、だから「あなたがわたくしの主義のやうにお働きになるといつても」わたしにだつてわたし自身がわからないのだから、駄目だろうという。これで見ると高瀬は賢治に、あなたの主義通りわたしも行動します、あなたにどこまでもついていきます、とはつきり告げたらしい。しかし賢治は、ライスカレー事件一つとっても、女性の独占欲、我欲には恐れをなし、到底いっしょには行けない、どうしてもついて来たいなら、君はカンパネラになれ、といったのではなからうか。今一つの下書にこうある、

「お手紙拝見、一一ご尤^{もつとも}です。まことの道は一つで、そこを正しく進むものはその道（法）自身です。みんないっしょにまことの道を

行くときはそこには一つの大きな道があるばかりです。しかもその中でめいめいがめいめいの個性によつて明るく楽しくその道を表現することを拒みません。生きた菩薩におなりなさい。独身結婚は便宜の問題です。一生や二生でこの事はできません。さればこそ信ずるものはどこまでも一緒に進まなければなりません。手紙も書かず話もしない、それでも一緒に進んでゐるのだといふ強さでなければ情ない次第になります。なぜならさういふことは顔へ縞ができて変り脚が片方になつても変り厭きても変りもつと面白いこと美しいことができて変りそれから死ねばできなくなり牢へ入ればできなくなり病氣でも出来なくなり、ははは、世間の手前でもできなくなるです。大いにしっかり運命をご開拓なさいまし。」

終りの方は世の常の愛を並べている。一番最後は自分(たち)の愛を自嘲したのだらう。そういう世の常の情ない愛でなく、へ手紙も書かず話もしない、それでも一緒に進んでゐるのだといふ強い愛、菩薩の愛を持つとよ、という。それはジョバンニとカンパネルラの愛であらう。皆の幸福をさがしてこそカムパネルラと一緒にに行けるというので、恋する者には残酷な別れこそ愛だという。だから菩薩になれとは、カムパネルラになれという事で、死んで相手の心に生きることだ。この手紙は精神の強い結びつき、無量の愛の存在を告げながら、愛を世にあるような形にすることは、全くあきらめてゐる。

高瀬露について、森莊己池はこう書いてゐる——賢治もはじめのうちはそのらが片づいたり、計画してゐる芝居に出演して貰うことを考へて、しっかりした人だと協会員にも語つて喜んでゐたが、彼女の好

意に溢れた贈物は、だんだん彼を恐縮させ息づまらせた。一方彼女の思慕と恋情は火のように燃えつのもつて、朝賢治がまだ起きないうちに訪ねてきたり、遠いところを日に二、三回もやってきた。彼は困惑し「本日不在」の札を貼り、顔に墨を塗り、レプラだと言い、押入れに隠れた。それでも彼女は勤め先の小学校の近くに家を借りて家財道具を整え、彼を待った。特に彼の贈つた布団が彼女を喜ばした。——さういう、賢治に結婚を迫る成熟した女性としてゐる。

一方『年表作家読本』では、「賢治自身、後に『雨ニモマケズ手帳』に『聖女のさまして近づけるもの』と書いたり、周囲の語るエピソードでも高瀬の一方的な恋心として悪く伝えられているが、必ずしもそうとばかりはいえないようである。」と含みのある表現ながら、賢治の側にも働きかけ、恋心があつたとしてゐる。

「聖女のさましてちかづけるもの / たくらみすべてならずとて / いまわが像に釘うつとも / 乞ひて弟子の礼とれる / いま名の故に足をもて / われに土をば送るとも / わがとり来しは / ただひとすぢのみちなれや」

彼女は今自己の名誉のために、わたしの像に釘を打ち、後足で泥をかけるが、ふりかえつてみると、へわがとり来しは / ただひとすぢのみちなれや」と賢治は反省する。自分が取つたのは公明正大なただ一筋の道であつたらうか、必ずしもそうではなかつた、やましいところがあったとはいきれない、恋心も情欲もあつたといつてゐる。

かつて「われらにひとりの恋人がある」と復興する理想の農民の傍らに一人の女人を描き入れたが、実際に女人が現れてみると、それ

はむづかしかった。「ポラーノの広場」のキューストは恋人のロザーロと一緒にいられなかったように。特に賢治の劣等感の裏返った使命感と、現実の彼女は両立し難かった。

こう見るといかにも愛の否定面ばかり見るようだが、賢治の、すべての生き物の幸せを求めるといふ膨大で古代的な愛のエネルギーは一種の狂気であって、エロスがひきがねの役をしなければとても飛翔することはできない、と考えると、——浮世絵の枕絵や危絵を大層集めたり、東京のお土産といつて裸体写真を配ったりした⁽¹⁸⁾事実は知られているが、——高瀬露の愛・エロスも、否定的にだけでなく肯定的に賢治の回心に働きかけたのではなかったか。

高瀬露は明治三四年一二月生、賢治より五歳下で、次妹シゲト同年、大正七年花巻高女卒業、すぐに准教員の資格を取り、教職に就いたのであろう、大正十二年九月には正教員となり、稗貫郡湯口村宝閑小学校に勤める。同校大正十三年の学校一覧を見ると、児童は男八八女八五の計一七三名で、それを校長、年輩の男先生、若い女先生即ち高瀬の三人で受持ち、複式学級で、彼女はづつと一、二年を受持っている。校務は校長が庶務、男先生が教務、女先生が衛生を担当、現在でいえば養護教諭を兼ねていた。月給はこの時三八円で、大正十五年に四三円、昭和三年に四五円になった。そして昭和七年に上閉伊郡上郷小学校へ転任した。それまで家は向小路だから羅須地人協会の近くだが、学校は遠かった。馬車などはなかったろうから自転車かたぶん徒歩で通勤したのだろう。『日本文学アルバム』では、「藤原嘉藤治をめぐる音楽愛好者の集りに出ていた」とあるので音楽の好きな、低学

年向きのやさしい先生だったろうが、どんな印象か、教わった子供たち聞いてみたい気がする。

注(1) 吉田和明『FOR BEGINNERS 宮沢賢治』(一九九二、現代書館)

(2) 井上ひさし『賢治の祈り』(『ちくま日本文学全集』一九九一)

(3) 菊池信一「石鳥谷肥料相談所の思ひ出」(草野心平編『宮沢賢治研究Ⅰ』所収)

(4) 白藤、平のものは山内修編『年者作家読本宮沢賢治』(一九八九、河出書房新社)、川村のものは吉田和明(前出)による。

(5) 伊藤チエの姪の伊藤ツルさんによると、賢治はチエとの見合いにも普段の作業衣で水沢の伊藤家へ来たという。

(6) 本郷隆「宮沢賢治の『音楽』と歌曲の作曲について」(『年表作家読本宮沢賢治』による)

(7) 『宮沢賢治研究Ⅰ』所収

(8) 佐藤文郷「農界の特志家／宮沢賢治君」(『岩手県農会報』昭和三年四月、『年表作家読本宮沢賢治』による)

(9) 井上ひさし(前出)

(10) むろん正確にはトシ子の病んでいた家。

(11) 飛田三郎「肥料設計と羅須地人協会(聞書)」(草野心平編『宮沢賢治研究』Ⅱ所収)

(12) 昭和三年九月にも心平から「コメーピョウタノム」の電報を受けとった病臥中の賢治は、金になりそうな造園学の本を送っている。

(13)「南の海の／南の海の／はげしい熱気とけむりのなかから／ひらかぬままにさえずる芳り／つひにひらかず水にこぼれる／巨きな花の蕾がある」

(14) ここまで森莊己池『宮沢賢治の肖像』(昭和四九年、津軽書房)

(15) 定本全集解説

(16) 宮沢淳郎『伯父は賢治』(一九八九、八重岳書房) 所収

(17) 森莊己池(前出)

(18) 飛田三郎(前出)

なお書簡の本文とその番号、注、備考などは、『新修宮沢賢治全集』(筑摩書房)によった。